

## だيسけの死とおきみやげ

小松 守  
(秋田市大森山動物園 園長)



この春、大森山で長く暮らし、市民に愛された人気者の雄ゾウ「だيسけ」が亡くなった。親しみを込め「だيسけ」を「彼」と呼び、このコラムに登場させたい。彼の思い出、その死で気づいたことに思いを巡らした。

彼は秋田市制100周年記念事業の一つとして1990年、ゾウ舎完成前年の秋、南アフリカからやって来た。初めて会ったのは成田空港の貨物ヤード、高さ1.5m程度の輸送箱内に入っていた。彼に抱いた第一印象はあどけない子ゾウ。不安のせいか箱の小窓から鼻先を出し、異国の空気を探るように私の手をまさぐっていたことを今でも思い出す。彼は別箱でやって来た雌ゾウといっしょに夜通し秋田に運ばれた。彼らの秋田暮らしは、にわか改造のラクダ舎の一室から始まった。2頭は順調に成育、兄妹のように仲良かったこともあり、成長時の雄ゾウが見せる特有の猛々しさも彼はあまり出さず、穏やかなゾウだった。

子どもたちがゾウ用に栽培した牧草をあげると美味しそうに食べ、餌やり体験場では長い鼻を伸ばし、子どもたちにやさしく接するなど、絵本とは違う本物のゾウを体感させてくれた。

ずっと以前だったが、ゾウ舎前でお母さんが子どもに童謡「ぞうさん」を小声で歌ってあげていた。彼は母子と向き合い、どこか楽しんでいるかのように鼻をブラブラさせ、体をゆらしていた。母子と彼はどこかシンクロナイズして見え、まるで絵本の世界のようだった。

そんな彼も年を重ねるにつれ、重い体重を支える足にトラブルを抱えるようになり、昨年秋には危機的状态に陥った。その時は飼育員のケアで乗り切ったが、3月上旬ついに倒れた。立てなくなった彼はまもなく息を引き取った。やさしい印象を最期まで保ったまま彼は逝った。

動物園のゾウ舎前に彼とのお別れの場、献花台が設けられた。遠方からのお花やメッセージもあったが、多くの方は直接園を訪れ、遺影前にお花を手向け手を合わせ、お別れを告げてくれた。記帳ノートには彼とふれあった思い出など、感謝の気持ちなどがたくさん記されていた。

そんな折、献花台で印象深い感動的なシーンに出会った。小さな女の子の手を引いてやって来た若いお母さんが「だيسけ君、死んじゃったんだよ。さようなら言おうね」と小声で話しかけていた。女の子の手には一輪のチューリップ、ぎこちない仕草で花を手向け、母の仕草をまね手を合わせていた。

また、別シーンでは男の子を連れて来たお母さんが遺影に手を合わせた後、「生きているもの、寂しいけど、必ず死んじゃうんだよ」と語りかけていた。男の子の視線はじっと遺影に向けられていた。何か特別な思い出があったのか。

これらのシーンを見て、微笑ましさを感じると同時に、子どもの豊かな心を育む上でそこに大切な何かがあるようにも思えてきた。

子どもが動物をとらえる感性は大人と違った独特のものがあるように思う。動物と会話して



心を通じ合わせたいという願望はその一つとも言える。遺影前のシーンは、子どもは彼に特別な思いで心を寄せ、彼は子どもの中でそれなりの存在でいたのだろう。だから彼に「さよなら」が言えたのだと思う。自分でない他者、好きな動物に関心を持ち、思いを広げることは子どもが自分を知る上でも大事な経験だろうと思う。

また、長く生きた彼には親自身の子どもの時代の特別な思い出があったりする。遺影前で見せたお母さんの仕草や態度、私はそれをある種のやさしさ、おもいやりと表現したいが、それを見た子どもは何かを感じ、真似たのだろう。いつもと違う「お母さん」という存在を学んだに違いない。非常に重要な幼児体験であろう。

親子で楽しむことの多い動物園は、子どもにとって普段と違う夢のような世界で親と一緒に動物体験ができる場だ。たくさん人がいる動物園という場で、彼にお別れの気持ちを伝えたことは、子どもの成長過程で大きな刺激だったと思う。また普段とは違う場面で感じる親のやさしさは、子どもの心に自分を見守る親の新たな一面を心に刻んだに違いない。彼はそんな機会を提供していたように思える。

動物園は、動物展示やふれあいを提供し、憩いや学びの場となり、また展示動物の保全や集客施設としての役割も果たしているというのが大方の存在意義への評価だろう。

しかし、先のシーンに出会い、動物園にはこれらとは違った意義があるように思えてきた。動物とのふれあいを通じ、子どもの豊かな感性や他者へ心を寄せやさしく接する心を育むユニークな教育の場としての存在だ。彼はこのことに改めて気づかせてくれたように思う。

人は太古の昔から動物と関わり生きてきた。どちらかというとな大人は実利的なところに重きをおくが、子ども、特に幼児は絵本の世界のよ

うに動物を自分と同じ対話できる存在として捉えることが多いのではないだろうか。子どもが動物に抱く独特の感情は、いっしょに生きる存在に対して人の心に潜在的にねむる素直な感性であり、やさしさの一面かもしれない。

子どもの心をもった天才詩人、まど・みちおは、「ぞうさん」の詩に母さんと同じ長い鼻を持ち生かされていることの素晴らしさを込めているが、多様な生き方、他者を尊重する大切さを教えている詩のようにも聞こえてくる。

こうした幼児と動物に関わるシーンをこれまでも私はたくさん経験した。寒い冬の動物園での一コマ。白い息を吐く池の水鳥を見つけた子どもが、「お母さん、鳥さんが白い息を吐いているよ」と得意げだった。お母さんは「あなたもハアと息吐いてごらん」と。子どもが水鳥と同じように白い息を吐くのを見て、「いっしょに生きているんだね」と話していた。人も動物も共に生きることをやさしく教えていた光景だ。この一コマには道徳の基本とも言える「共生」と「利他の心」が見て取れる。

現代社会は人へのやさしさ、思いやりが薄れがちなところがある。原因は単純ではないが、子どもを育む環境の乏しさに問題の根っ子がありそうだ。大切なのは幼児期から他者を思う心を養い、また大人はその姿を見せることだろう。

日本社会の未来を憂いた歴史作家の司馬遼太郎は「二十一世紀に生きる君たちへ」で人への思いやりや、いたわりの心の大切さを教え、教育学者の大田堯は「教育とは何か」で子育ての原点、種持続の営みを再考すべきと説く。

動物園を大上段に教育の場と言うつもりはないが、子どもの豊かな心を育む場の一つとして捉え直していいかもしれない。彼はそれに気づかせてくれ、動物園へのおきみやげとして去ったように思えてきた。だいすけ、ありがとう。